

会員だより

パワースポット

京都の名所巡り

今年には明治維新百五十周年という事で、京都の普段見られない名所旧跡や仏像、絵画などが公開されている。あれこれ観たいものばかりだが、その中でも昨年「あさが来た」の大同生命を見学した思い出があり、広岡浅子出身の旧三井家下鴨別邸が含まれていたもので、ツアーに参加することにした。バスは京都植物園の北側に駐車したので、土地勘の悪い私でもV G 観輪などで3回も来て、勝手がわかり、一層親しみを感じた。



下鴨神社

すなわち、このお邸は紉の森(ただすのもり)に続く下鴨神社の南に位置し、この地に三井家の守り神が遷座され、その参拝の際の休憩所として京都市街地の木屋町(きやまち)にあった明治13年建築の別邸を、大

正14年主屋としてここに移築されたものです。



旧三井家下鴨別邸庭園

旧三井家とは江戸時代から続く豪商で11家があり、例の「あさ」の実家はそのうちの一つの出水(小石川)三井家であり、実際にはこの下鴨別邸には起居していないことがわかった。旧三井家は戦後の財閥解体で、この別邸も昭和24年に国に譲渡され、昭和26年から平成19年まで近くにある京都家庭裁判所の所長官舎として使われていた。その後整備され、近代京都で初期に建設された主屋を中心として、大正期までに整えられた大規模別邸の屋敷構えの元の姿を取り戻し、良好に保存且高い歴史的価値を有していることから平成23年に重要文化財に指定された。まず眼に付くのは三階の望楼だが、今回公開はされておらず残念だった。

庭園から見る主屋や茶室の眺めは派手さも地味さも程よく設計され、庭園に立つだけで落ち着きを取り戻す。11月の紅葉の頃、2階3階が公開されるので再度訪れたい。三井家下鴨別邸を出ると、紉の森、下鴨神社の森閑で静寂な地域に入ると言いたいところだが、季節もよく観光客も多く、その境地に落ち入れない。ただ都会の中に原生林に囲まれたこんな広い敷地があるとは驚きであった。幸い下鴨神社の内殿の一部を見ることが出来た。昼食は浄土宗総本山の知恩院を横目に見て、和順会館に急いだ。バス出発の待ち時間まで、せめて美食の恩返しに御廟への石段を登り、手を合わせてきた。いよいよ今日第二の本命、京都迎賓館の見学である。建物内部・内装・調度品・壁画など日本の和の最高技術を極めた作品の集合体であり、どこを見ても溜息が出る。庭は深山幽谷から流れ出る水が注ぎこむ広大な池が廊橋を挟んで、南北に分けられている。片方には震災のあった山古志村の錦鯉が泳ぎ、もう一方には和舟(わせん)が

四季彩

リュウキンカ (立金花)

2-6月に咲くキンポウゲ科の黄金色の花とツヤツヤとした葉と短いながらもすぐに立つ莖。まだ寒い頃から咲き始めるので、そのあでやかな黄色に思わず立ち止ってじっと見つめる。持ち主はツワブキと説明したが、花は似ているが莖と葉が違う。水辺や沼に生息と説明があるが最近の栽培種は畑地でもプランターでも楽しめるようになった。知人とも花ビラの数について5枚、いや7枚とも話していて、ついに10枚までみつけた。さらに調べてみるとみんな正解、ただひときわ黄金色に輝くのは萼片で、約2cmの中心部分が花である。花後、根莖が伸びて夏眠状態になって増える。変種・エゾのリュウキンカ、えんこうそう(猿喉草)

記：上村サト子



写真：神田さん提供



ブータン国王夫妻が舟遊びを楽しまれた池

浮かんでいる。ブータン国王夫妻が第一番目の接待客だったとか。とにかく無粋な私が説明するより、皆様ご自分の眼でその素晴らしさを確かめて下さい。その後、京都御所内の仙洞御所を見学した。京都御苑の中で京都御所も迎賓館も仙洞御所も同じ敷地にあるが、なんと広い事。バッグチェックを受ける入り口から入り直さなければいけない。中の紫宸殿で来年皇太子の天皇即位の礼の際にご使用になる高御座・御帳台(たかみくら・みちようだい)をかみくら・みちようだい)を遠くに見ることが出来た。御所でお別れし、高槻に直接帰ってきた。添乗員に掛けられた言葉が「この先保険は効きません」と。どこか聞いたような...。わが街紹介の時、会長が事故の杞憂にボランティア保険の有効か否かの言葉かな。

記・写真：上村サト子



仙洞御所のお庭